

## 英首相、離脱再交渉続ける

- ◆メイ首相、月内を目処に EU との離脱再交渉を継続する方針
- ◆18年の英成長率、6年ぶりの低水準
- ◆BOCは4月か5月に利上げ見込みだが、後ずれする可能性も

### 予想レンジ

ポンド円 137.00-145.00 円

加ドル円 82.00-86.00 円

### 2月18日週の展望

英国の欧州連合（EU）離脱を巡る混迷が依然として続いており、ポンドは上値が重い。方向感が出ていく状況で値動きは限定的か。EUと合意した離脱案は1月に英議会で否決され、今月の13日を目処にメイ首相はEUと再交渉に挑んだが、成果を上げられず、英議会は協定案を修正するためEUと協議を続けるというメイ首相の方針を否決した。ただ、採決の結果に法的な拘束力はなく、メイ首相は月内に協定案の修正をまとめることを目指して、EUとの協議を継続する見通しだ。3月29日の離脱日に向けて残された時間が少なくなり、選択肢も限られる中、メイ首相は時間稼ぎの戦略で議会がやむなく離脱案を承認することを狙っているとの見方もある。

メイ首相は野党・労働党に歩み寄りの姿勢を示し、労働党のコービン党首が求めた離脱を巡る5つの要求項目に書簡で回答した。メイ首相は、EUとの関税同盟に関する見解の相違などはあるものの、総選挙や2度目の国民投票より「合意ある離脱」を目指す点では意見が一致していると強調し、労働者の権利や経済的に取り残された地域への追加支援などで譲歩する姿勢を示した。ただ、残された時間は少なく、離脱再交渉の相手のEUが再交渉に応じない限り、話にならない。英国は「合意ある離脱」、「合意なき離脱」、「交渉期間の延長」のいずれかを選択する必要がある。

今週発表された英国の10-12月期実質国内総生産（GDP）は前期比で英中銀の予想を下回る+0.2%にとどまった。7-9月期の+0.6%から伸びが鈍化し、2018年通年の成長率は+1.4%と6年ぶりの低水準となった。離脱をめぐる不透明感が消費者や企業に不安を与えたことや、世界経済の減速が響いた。

米連邦準備理事会（FRB）のハト派回帰で、各主要通貨は軒並み買い材料が乏しい。しかし消去法的に依然としてドルが買われやすく、加ドルは対ドルでの上昇余地が限られている。対円では米中通商協議などを背景としたリスクオン・オフの動きに左右されるか。昨年10月以降に急落した原油相場の加景気・物価への影響が1-2四半期に及ぶ可能性がある。カナダ中銀（BOC）は3月の会合で利上げを見送り、経済指標や世界の動向を見極めながら、4月か5月に追加利上げに踏み切る可能性が高いとみられる。ただ、先進国の中でBOCはFRBに続いて金融政策の正常化に向かったものの、今年に入って世界景気減速の高まりを背景にFRBも含めてハト派姿勢を強めており、先行きの金融政策は不透明だ。

主要産油国の減産が続く見通しで、原油相場の下値は堅いとみられており、加ドルの下支えとなりそうだ。来週は12月の卸売売上高や小売売上高などの発表が予定されている。

### 2月11日週の回顧

ポンドは英国のEU離脱をめぐる先行き不透明感や、弱い10-12月期GDPを背景に上値の重い動き。ポンドドルは1.27ドル台まで下落し、ポンド円は141円前半に押し戻されるなど上値の重い動きとなった。ドル/加ドルは1.32加ドル台を中心に方向感に欠けたが、米中通商協議への期待を背景としたリスクオンの円売りで、加ドル円は83円後半まで切り返した。（了）